

宮沢賢治「狼森と笹森、盗森（おいのもり と ざるもり、ぬすともり）」(抜粋)

小岩井農場の北に、黒い松の森が四つあります。いちばん南が狼森で、その次が笹森、次は黒坂森、北のはづれは盗森です。(略)

そこで四人の男たちは、てんでにすきな方へ向いて、声を揃へて叫びました。

「こゝへ畑起してもいゝかあ。」

「いゝぞお。」森が一斉にこたへました。

みんなは又叫びました。

「こゝに家建てゝもいゝかあ。」

「ようし。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた声をそろへてたづねました。

「こゝで火たいてもいいかあ。」

「いゝぞお。」森は一ぺんにこたへました。

みんなはまた叫びました。

「すこし木貰つてもいゝかあ。」

「ようし。」森は一斉にこたへました。

男たちはよろこんで手をたゝき、さつきから顔色を変へて、しんとして居た女やこどもらは、にわかにはしやぎだして、子供らはうれしまぎれに喧嘩をしたり、女たちはその子をぼかぼか撲つたりしました。(略)

ところが、土の堅く凍つた朝でした。九人のこどものなかの、小さな四人がどうしたのか夜の間に見えなくなつてゐたのです。みんなはまるで、気違ひのやうになつて、その辺をあちこちさがしましたが、こどもの影も見えませんでした。

そこでみんなは、てんでにすきな方へ向いて、一緒に叫びました。

「たれか童やど知らないか。」

「しらない。」と森は一斉にこたへました。

「そんだらさがしに行くぞお。」とみんなはまた叫びました。

「来お。」と森は一斉にこたへました

そこでみんなは色々の農具をもつて、まづ一番ちかい狼森に行きました。森へ入りますと、すぐしめつたつめたい風と朽葉の匂とが、すつとみんなを襲ひました。

みんなはどんどん踏みこんで行きました。すると森の奥の方で何かパチパチ音がしました。急いでそつちへ行つて見ますと、すきとほつたばら色の火がどンドン燃えてゐて、狼が九疋、くるくるくる、火のまはりを踊つてかけ歩いてゐるのでした。だんだん近くへ行つて見ると居なくなつた子供らは四人共、その火に向いて焼いた栗や初茸などをたべてゐました。狼はみんな歌を歌つて、夏のまはり燈籠のやうに、火のまはりを走つてゐました。

「狼森のまんなかで、火はどろどろぱちぱち火はどろどろぱちぱち、ころころぱちぱち、栗はころころぱちぱち。」

みんなはそこで、声をそろへて叫びました。

「狼どの狼どの、童しやど返して呉ろ。」

狼はみんなびつくりして、一ぺんに歌をやめてくちをまげて、みんなの方をふり向きました。すると火が急に消えて、そこらはにわかには青くしいんとなつてしまったので火のそばのこどもらはわあと泣き出しました。狼は、どうしたらいいか困つたといふやうにしばらくきよろきよろしてゐましたが、たうたうみんないちどに森のもつと奥の方へ逃げて行きました。そこでみんなは、子供らの手を引いて、森を出やうとしました。すると森の奥の方で狼どもが、悪く思わないで呉ろ。栗だのきのこだの、うんにご馳走したぞ。」と叫ぶのがきこえました。みんなはうちに帰つてから栗餅をこしらへてお礼に狼森へ置いて来ました。(略)